

親と幼児の関係に関する理論（1960）
（ウィニコット『情緒発達の精神分析理論』）

背景

1961年にエディンバラで開かれた国際精神分析学会において、Phyllis Greenacre（ニューヨークの女性分析家）とともに行われた討論がもとになっている

概要

（ウィニコットの精神分析臨床より）

- ・精神分析療法では個人の万能感を越える外傷体験はおこらない。あらゆるものは自我統制のもとに収束され、第二次過程（現実原則）とつながりをもってくる。精神分析での変化は、外傷的諸要因が患者の万能感の範囲内で素材のなかにはいり込んできたときにおこり、それにたいして投影という観点から解釈がなされる
- ・幼児期では、幼児の力の及ぶ範囲を越えて良いこと悪いことは起こる。幼児期というのは幼児が外界の諸因子を集約して万能感の領域内にもち込む能力の形成される過程。自我を支える母親の育児に助けられて可能になる
- ・患者が投影として受け容れることができるようなかたちで環境因子を提示できるようになるのは、分析医と職業的場面のもつ信頼性のなかで患者が自信をもつ能力を再発見したあとのこと。そのような古典的精神分析に**運わるくも**適しない症例では、患者は幼児期の母親による育児のなかで体験できなかった信頼性を、分析医の態度なかにはじめて見出さなければならない
→幼児の環境で良かったことや悪かったことは実は投影ではない。にもかかわらず、幼児が健康に発達するためにはすべてのことが幼児には投影のように映ることが必要。幼児期最早期には万能感と第一次過程が働いている。そして、本当の'自分でないもの'Not Meの認識は知能の問題、つまり高度な知的加工Sophisticationと個人の成熟に属する問題である

（フロイト「精神機能の二原則に関する公式」の脚注）

- ・Freudは母親による育児の機能に注目してはいるがこの問題を放置した
- ・幼児と育児とは一緒になってひとつの単位を形成している

“幼児”Infantという言葉

- ・幼児という言葉には“話さない”Infansという意味がある。幼児期は言語的表現の理解にもとづいてなされる育児よりも、母性的共感にもとづいてなされる育児の時期
- ・幼児期は本質的には自我の発達する時期。情緒発達過程のなかで一般に自我はイドを統制下におくことができるようになる。それは母親が幼児の自我を補強して力強く安定したものとするから

歴史的展望

- ・Freudは自己の独立と自我の構造化、独自の身体図式を前提としている。本論文の論点はこうした事態が達成される過程に、つまり本能欲動や対象喪失から生じる不安の基盤となる自我の構造が達成される過程にある。この人生早期の不安は去勢不安でも分離不安でもなく破滅の不安Anxiety about Annihilationである
- ・Kleinは完全な依存Full Dependenceのテーマを発展させなかった。ここで考察しようとしていることは、分析医が依存という現実を受け容れることと、転移のなかでそれを操作することの違いである

A. 幼児

幼児の生得的な潜在力は母親による育児と結びついたものとならない限り幼児そのものにはならない

生得的な潜在力とその運命

両親による満足な育児の三段階

(a)抱っこHolding

「抱っこ」は環境から与えられるすべての供給を意味している（時間的要因が漸次加わってくる三次元または空間的關係）。純粹に生理学的なもののようにみえる諸過程を含む

(b)母親と幼児とが（互いに独立した存在として）共に生きるLiving with。（母親に代わって環境調整をする）父親の機能は幼児に認識されていない

対象関係ができています。つまり幼児は母親に吸収された状態から離脱しているか対象（母親）を自己の外側のものとして知覚している

(c)父親、母親、幼児の三者がともに生きる

抱っこの時期における幼児の情緒発達

- ・第一次過程、原初の同一化、自体愛、一次的ナルシズムは生きた現実
- ・自我は未統合な状態から構造化された統合へと変革をとげ、幼児は人格解体に伴う不安を体験できるようになる。“単位状態”と呼べるようなものに達し、幼児はひとり人間、正当な自らの権利を持った個人となる
- ・精神が身体に住みつく。幼児は内側と外側を、つまり自身の身体図式を持つまでになる。内的な心的現実を仮定することが意味を持つ（Kleinの仕事が適用できるようになる）
- ・知的活動の夜明け、精神とは違ったものとしての心のはじまり
- ・衝動の二つの根源が結びつきはじめる。運動や筋肉エロティズムに属するバラバラの要素が融合 Fusionして性愛帯のお祭りの機能にまとまる
- ・主観的な対象との関係から客観的に知覚される対象との関係に移行する。母親との合体から独立へ（抱っこから“共に生きる”へ）

依存

(i)絶対的依存

幼児は母親の育児について知る手立てさえもたない受け身の立場

(ii)相対的依存

幼児は育児でどんなことをしてもらいたいかを自分で知るようになり、それを独自の衝動と結びつけるようになる（転移のなかに再現）

(iii)独立への方向

育児の記憶や独自の欲求の投影や育児の詳細のとり入れが積み重ねられ、環境に対する自信が発達。深い含蓄を持った人格の知的理解の発達

個の分立

- ・中心的または本当の自己とは、存在の連続性Continuity of Beingを体験し、独自のやり方と早さとして独自の心的現実と独自の身体図式を獲得した生得的な潜在力
- ・中心的自己の分立Isolationを妨げる侵害Impingement、つまり母親の側の（つまり育児での）失敗に関連して幼児期再早期の諸防衛があらわれる。自我機構によって、侵害してきたものは幼児の万能感に集約され投影として感じられるようになる（偽りの自己を組織することも）。侵害が防衛を切り抜けた場合、自我の中核はゆすぶられることとなる（精神病的不安の本質）

破滅

- ・反応することは存在を中断し破滅を招く。抱っこという環境の主な目的は、幼児に反応をひきおこしてその独自の存在を破滅へと導く侵害を最小限に抑えること。適切な条件のもとでは幼児は連続ある存在を確立し知的加工Sophisticationを発達させる。それによって幼児は侵害してきたものを万能感の領域に集約させることができる

B. 母親による育児の役割

1. 生理的欲求の満足を与えること。身体と精神の分化はなされていないかその過程にある
2. たよりになること（信頼性）。母親の共感が秘められた供給のなかに信頼性が芽生える

抱っこ

- ・抱っこは物理的侵害からの防護、母親が幼児に愛情を示してやれる唯一ひとつの方法、本能満足や対象関係の基礎
- ・精神病（分裂病）になりそうにないという意味での個人の精神的健康は、出生前の身体的供給との連続である母親の育児がその基盤になっている（環境からの供給の失敗は悪影響を及ぼす）
- ・転移のなかにあらわれることはない

母親の育児のある細部の検討

共感にもとづいてなされる幼児の欲求に対する母親の理解と、幼児や小さな子どものなかの欲求をあらわすあるものにもとづいてなされる母親の理解への転換のあいだには、非常に微妙なちがいがある

C. 母親のなかでおこる変化

母親は幼児との投影的同一化を通じて幼児の感じるものを知り、抱っこのときや環境からの供給のときに幼児の求めたものをかなりの確に与えることができる（**幼児の欲求に対する生きた適応**）

思ったこと

- ・自我心理学の論客とおこなわれた討論がもともになったという経緯もあったせいか、これまでの精神分析の展開をいつも以上に見据えながら自身の考えを明らかにしているように感じた
- ・ウィニコットは出生以前からの連続において人間を捉えている。生得的な潜在力といういわゆる人間になる以前のものをも視野に入れている
- ・依存という現実を受け容れることと転移のなかでそれを操作することの違い。実際の臨床場面でのちがいは
- ・精神とは違ったものとしての心のはじまり？
- ・深い含蓄をもった人格の知的理解？